

虹の架橋

今月の題字
木戸信江さん

(みどり市大間々町)

お元気で満百歳の誕生日を迎えた木戸さんは歌集も今迄に2冊出版。常夜灯の灯りを歌った自筆の歌の短冊はいつも足利屋に飾らせていただいています。

虹の架橋

検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

ながめ黒子の会設立二十五周年
浪曲「慈母観音」と「白餅大名」

六月三日(日)午後二時から、
「ながめDE浪曲」を開催します。
日本浪曲協会会長の富士路子さんが演じる「慈母観音」と「白餅大名」は共に人情話の傑作です。
本物の浪曲の素晴らしさを是非、ながめ余興場で味わって下さい。
(木戸銭・前売当日とも千円)

ながめ黒子の会設立25周年特別企画
富小路子の世界
浪曲 DE 浪曲
6月3日
日 平成30年6月3日(日)
14:00開演(13:30開場)
場所 ながめ余興場
全席自由 ¥1,000円
浪曲 富士路子 (演目) 慈母観音 白餅大名
東家孝太郎 (演目) 白丸丸
伊丹秀敏 (演目) 伊丹秀敏

《慈母観音のあらすじ》
捨て子だった藤三郎は仏師・淳慶に拾われ、実子として育てられ、一人前の仏師に成長します。あるとき、徳川綱吉の生母桂昌院

から慈母観音像の注文が舞い込むみすが藤三郎は吉原で遊興にふけていました。淳慶は激怒し、藤三郎が実子ではなく旅の女の捨て子であることをあかし、捨てられた時に残されていたおもちやのお面や笛、太鼓を渡し「即刻この家を出て行け」と言い渡します。
義父の淳慶に追い出された藤三郎は、形見のお面や笛・太鼓を背負い、法華経を霊場に奉納する巡礼の旅に出ます。東北の湯治場で一夜の宿を求めた茶屋で思いがけない出来事に遭遇する藤三郎。感動的な結末を迎える慈母観音のお話は涙なくしては聴けません。
落語は「嘶す」、講談は「読む」、浪曲は「語る、うなる」芸能と言われ、義理人情を重んじる日本人の琴線に触れる芸能です。
富士路子さんの絶妙の語りや三味線で伴奏する曲師の伊丹秀敏さんは八十三歳。芸歴七十余年の浪曲界の重鎮です。ピタリと呼吸のあつた芸をお楽しみください。

小耳にはさんだ
いい話
(文責・菊)
《274》



難が有るから有り難い

中学校の先生だった腰塚勇人さんは二〇〇二年、スキーで転倒して首の骨を折り、医師から「一生、寝たきりか、よくて車イス」と宣告されました。しかし、必死のリハビリで「奇跡の復活」を遂げた腰塚さんは「命の尊さ」や「生きていくことの素晴らしさ」を伝える講演活動をはじめました。「命の授業」の講演の様子はテレビや雑誌で何度も取り上げられています。

腰塚さんは毎月『幸福』という新聞を発行しています。五月から慈母観音像の注文が舞い込むみすが藤三郎は吉原で遊興にふけていました。淳慶は激怒し、藤三郎が実子ではなく旅の女の捨て子であることをあかし、捨てられた時に残されていたおもちやのお面や笛、太鼓を渡し「即刻この家を出て行け」と言い渡します。
義父の淳慶に追い出された藤三郎は、形見のお面や笛・太鼓を背負い、法華経を霊場に奉納する巡礼の旅に出ます。東北の湯治場で一夜の宿を求めた茶屋で思いがけない出来事に遭遇する藤三郎。感動的な結末を迎える慈母観音のお話は涙なくしては聴けません。
落語は「嘶す」、講談は「読む」、浪曲は「語る、うなる」芸能と言われ、義理人情を重んじる日本人の琴線に触れる芸能です。
富士路子さんの絶妙の語りや三味線で伴奏する曲師の伊丹秀敏さんは八十三歳。芸歴七十余年の浪曲界の重鎮です。ピタリと呼吸のあつた芸をお楽しみください。

世界一小さな
定利屋
トイレ美術館

今月の写真《274》
黒内一光さん『吉兆』



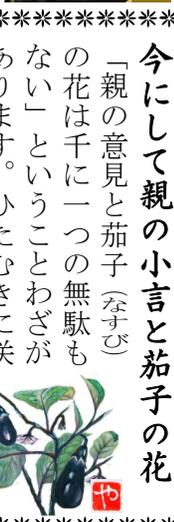
写真愛好家が集まる「ぐるっぺ風景」の代表の黒内一光さんは写真の技術や感性だけではなく、仲間同士の絆を大切に、その結束力が年に一度の写真展を魅力的なものにしています。
一期一会という言葉が噛みしめながら写真を撮る黒内さんは、「今日今でしかない季節、時間、天候、全てを疎かにしないと強い思いが観察力の濃度を増し、好奇心を湧き上らせ、新鮮な風景の発見につながる」といいます。
この作品に『吉兆』というタイトルをつけた黒内さんの感性に憧れと共感を感じています。

り越えるか決まると思いますが、皇后美智子様という「子どもを幸せにするのではなく、どんな状況でも幸せになるように育てる」という子育ての極意がそこにあります。
「決断」とは、その道を決めることだけではなく、選ばなかった道への未練を断ち切るのだと思います。
人生は決断と選択の繰り返しです。選んだ道には間違いも失敗もないのです。さまざまの経験、人間関係は、いろいろな縁が重なって自分のところにきたものと思えます。
苦しき・悩みは人生を楽しませるためにでてるものだと私は思っています。

靖ちゃん日記

五月十三日(日)
今年もぐんま百キロウォークの第四休所まで応援ボランティアを買って出た。八年前に親友の宮本成人さんがはじめた百キロウォークは「タイムを競うのではなく、自分の限界への挑戦」。今年の参加者は二百八十三名。国道五十号みどり市笠懸町のファミリーマートの駐車場にテントを張らせてもらい、コーヒータンや甘酒や漬物を用意して参加者の到着を拍手と声援で迎えた。参加者おこの地点を通過するのは、十二日の夜から十三日の朝にかけて、夜明けの薄暗さに、睡魔と不安定に覆われる廊の八十キロ地点。「ここがゴールだったからさ」というつぶやきが突然として伝わってくる。真夜中の二時八分、「アンバサダー」のタスキをかけたお笑い芸人アンカンミンカンの川島くんが到着。スタッフ六人が大きな拍手で迎えた。去年よりずっと早いタイム。「アンバサダー」は「大会の大使」のこと。さすが「たいし」もんだ。

今にして親の小言と茄子の花
「親の意見と茄子(なすび)の花は千に一つの無駄もない」ということわざがあります。ひたむきに咲き、そこから茄子の実を結び紫色の花を見ていると、父の小言を思い出します。若い頃は父に反発ばかりしていましたが今にして思うと、父の言っていたひと言ひと言が人生の教科書のように思い出されます。厳しくて、優しく、まじめでユーモアがあり、人情もろい一面と頑固で強情な面を兼ね備えていた父でした。
今年も父の日がやってきます。父と母がいて、そのまた父と母がいて、血を継いだ自分がいます。



木村先生のブログを、腰塚さんの生き方が重なって見えてきます。
人との縁を大切にしている腰塚勇人さんは「五つの誓い」をたてています。
①心は人の痛みがわかるために使おう
②手足は人を助けるために使おう
③耳は人の言葉を最後まで聴いてあげるために使おう
④目は人のよいところを見るために使おう
⑤口は人を励ます言葉や感謝の言葉を言うために使おう
見習いたいと思います。

第二七五号は七月一日(日)発行予定です。